

あ。う。る

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 39

新庁舎ができるまで約八十年に わたって道政を担ってきた 歴史ある建物、道庁赤れんが庁舎。

れんがの歴史

主にアメリカから招かれた技術者が、北海道の近代化のためにその技術を伝え、れんが。あの温かなれんがの色は、北の大地に芽吹いた西洋文化の形見でもあり、なぜか我々を魅了する。

そのれんがだが、歴史は非常に古く、約一万年前にメソポタミアで日干しれんがが造られ、やがて古代エジプト・ギリシャなどの建物で使われるようになった。日干しれんがではなく、現在のように焼いたれんがが出現するのは紀元前三千年頃。これを発展させたのはローマ人だった。

日本ではれんがを多く使うようになったのは、明治時代から。文明開化のシンボルとして使われた。しかし、一九二三（大正十二）年の関東大震災によって、れんがの建物のほとんどが倒壊してしまい、地震の多い日本には適さない建築材料とのレッテルが貼られ、あつという間にれんが建築は衰退していった。

北海道のれんが製造

北海道でのれんがの製造は、一八七二（明治五）年、函館近郊の茂辺地村に建設された開拓使唯一のれんが工場、茂辺地煉化石製造所がその始まりで、樺戸、帯広、網走の集治監でもれんがが作られた。

その後、一八九一（明治二十四）年に現在の江別市野幌でもれんが生産が始まり、道内最大のれんが生産地となった。昭和三十年代の最盛期には十五社ものれんが工場が建ち並んでいたという。

お隣の札幌には、野幌よりも早く、白石村に大きなれんが工場があった。

北海道の美しい赤れんがの建物といえば、旧サツポロビール札幌第二工場（サツポロビール園）・旧石田邸（江別市ガラス工芸館）・旧手宮機関車庫・函館の金森倉庫・トラピスト修道院などが挙げられる。

このように道内にはれんがで有名な建物がたくさんあるが、中でも北海道庁の赤れんが庁舎は、北海道を代表する建物として知られている。

赤れんが庁舎

赤れんが庁舎のれんがは白石村と豊平村などで造られたもので、約二五〇万個ものれんがが使われているそうだ。

赤れんが庁舎の設計は、平井晴二郎を主任とした道庁の技師たちだった。アメリカ風ネオ・バロック様式のれんが造りを採用し、建築資材の多くは道産品だ。

赤れんが庁舎には 明治の香りが残っている



焼失翌日の赤れんが庁舎（札幌市公文書館所蔵）

間口六一メートル、奥行き三六メートル。塔頂部までの高さは三三メートルで、当時としては国内有数の大建築物であった。

建物の頂にそびえる八角塔は、一八七三（明治六）年に開拓使顧問ケプロンの計画によって建てられ、六年後に焼失した開拓使札幌本庁舎の八角塔を模したものだ。当

時、アメリカでは、独立と進取のシンボルとして、ドームを乗せる建築様式が流行していた。一八八六（明治十九）年に北海道庁が設置され、初代長官岩村通俊が赤れんが庁舎建設に当たり、この八角塔にこだわりの、設けたものといわれている。

煙突を思わせる換気塔は、明治時代の西洋建築で流行した意匠で、避雷針も装飾を兼ねたデザインになっている。屋根は今では珍しい粘板岩を用いた天然スレート葺きだ。窓は防寒のため二重構造となっており、ふだんは窓の両側にある木製の箱形化粧枠の中に、ガラス戸が三つに折りたたまれて収納されている。

赤れんが庁舎は一九〇九（明治四十二）年に火事のため内部及び屋根が焼失してしまっただが、れんがの壁部分はほとんどが無傷で残り、修理工事によって一九一一（明治四十四）年に復旧。その後、一九六八（昭和四十三）年まで北海道庁本庁舎として使用されていた。現在使われている新庁舎ができるまで、約八十年にわたって道政を担ってきた赤れんが庁舎は、同年、北海道百年を記念して創建当時の姿に復元し、永久に保存することになった。

翌年には、これほど優れた明治時代の洋風建築物は国内でも数少ないとし、国の重要文化財に指定されている。

周辺にも歴史が

建物の前庭には、チューリップなどの美しい花々が咲き誇り、赤れんが庁舎によく映えている。また、かつては防災のための貯水池として設けられた池には、マガモや

コイを見ることが出来る。道庁前のイチヨウ並木は、一九二五（大正十四）年に植えられた現存する北海道最古の街路樹だ。

北三条広場のれんが舗装の下には、一九二四（大正十三年）年に施工した札幌市内初の舗装道路（木製れんが）が保存されており、赤れんが庁舎の門のところには、北海道と札幌の道路の始点を示す「札幌市道路元標」もある。

そんな明治時代の忘れ形見である赤れんが庁舎とその周辺の遺物が、令和となった今もなお、歴史の証人として時代の流れを見守っている。



赤れんが庁舎と前庭（札幌市公文書館所蔵）



「札幌市道路元標」
（札幌市公文書館所蔵）

あうるの杜

船木 祝さん

Interview

札幌医科大学で哲学と医療倫理学等の講義を担当し、今年6月に中西出版から『響き合う哲学と医療』を出版した船木祝さんのあうるの杜です。

カントとドイツ留学

父は英文学者ですが、哲学が大好きで、書齋に行くとキルケゴールやニーチェ、仏教関係の本など、哲学書がたくさんありました。

音大に行きたかったんですけども、父に一生できる仕事ではないと、大反対されました。「じゃあ、何をしたらいいんですか」と尋ねたら「哲学をしなさい」と。後で考えてみたら哲学でも食べていけないと気づいたんですが(笑)。

キルケゴールは大好きだったんですけど、僕とは正反対の人を研究した方が勉強になるのではないかと考えました。厳格で立派な人という、自分とは真逆な人を研究しようということでカントを選んだんです。

大学院生のころ、ドイツの国際カント学会に行ったところ、非常に刺激を受け、ドイツ留学を決心。三〇歳のときにトリアー大学に留学しました。私費での留学でしたが、背水の陣でドイツに行きました。

カント哲学からバイオエシックスに

哲学では職はないよといわれていたとおり、トリアー大学でカントを一生懸命やって博士号をとったけれども、帰国してみるとやはり職がない。そこで、最近バイオエシックスがはやっているので、それをやったらどうだろう、そういえばドイツ人はこんなこと

議論は楽しいもの

議論というのはけっして真面目で深刻なものではなく、楽しいものなんだ、ということ、僕は哲

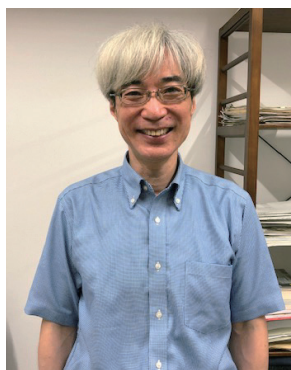
議論は深刻なものではなく、楽しいもの



船木 祝

ふなき しゅく

1963年生まれ。札幌医科大学医療人育成センター教養教育研究部門准教授。学習院大学人文科学研究科哲学専攻博士後期課程単位取得退学。トリアー大学Ph.D.(哲学)。哲学・倫理学専攻。学習院大学博士後期課程でカント哲学を研究。1993～2001年までドイツのトリアー大学に留学。カント哲学及び生命倫理・医療倫理を研究。哲学と医療をつなげる研究に関心を持ち、医療を巡る様々な問題に取り組んでいる。臨床死生学会推薦理事。人体科学会推薦理事。著書に『響き合う哲学と医療』(中西出版、2020年)、『教養としての生命倫理』(共著、丸善出版、2016年)、『サイエンスとアートとして考える生と死のケア—第21回日本臨床死生学会大会の記録』(共著、エム・シー・ミュージス、2017年)等がある。



学力フェというものもやっています。ドイツに留学して一番感激したのは、議論というのはこんなに楽しいものなのかということ。上下関係もなく、立場を超えて皆が真理を求めて意見を交わす。ふだん思っている関心事や問題意識など、何でも話せるわけじゃないですか。後味がいいんですね。

カントの哲学を批判哲学といいますが、カントは「非難」と「批判」を区別し、「非難」というのは相手の立場を貶めようとして攻撃すること、「批判」というのは吟味するといふもので、全然違うんです。何かあれば直接ハッキリいってもいいんだと。あまりにも、相手のことを貶めたり、立場をなくそうとしたりすることは、けっして共同体にとってはいいことにならない。ただ単に完璧性と自由自立だけを追い求め、相手にそれを押しつけて、叶えられない人を排除してしまうと、本当の意味での繋がりがというものが出てきません。

人間とは何かに関心を持つ

人間はいずれ老いていく存在なので、いつ病気になるかわからない。障害を持つかもしれない。期せずしてミスする人もいるかもしれない。人間とは何かということ、基本的にはミスをしてしまうところもある存在なんだと。そういうことも含めて人間とは何かというのを考える。それが一つの方向かなと思います。

新型コロナウイルス感染症においても、コロナに罹ってしまった人を、ただ単に攻撃したり排除したりすることはけっして共同体にとっていいことにはならない。誰もがコロナに罹ってしまうかもしれないような脆弱性を持っている存在だということを踏まえて、人との繋がりを考えた方がいいと思います。自分も含め人間としての弱さを認識できるのが、成熟した人間の一つの特徴です。

新型コロナウイルスのことでわかったのは、医療というのは科学・エビデンスを重んじているわけですけども、必ずしもすべてが確実に運行しているわけでもない。不確定の中でどのような指針を選んでいくかという一つの手掛かりとして、人間とは何かということに関心を持って、本を読んだり人と対話をしていったりする必要があるんです。

人間とは何かというのをたえず考え、いろいろな人と議論をしたり、さまざまな本を読んだりして、いろいろな人間を知ることです。

「上様と世論」

お店で領収書をもらうとき、よく宛名に「上様」と書いてもらいますよね。

領収書に上様と書かれるようになったのには、主に二つの由来があるとされています。

一つは、室町時代の大名や江戸時代の徳川将軍に対し、尊敬の意味を込めて上様と呼んでいたように、お客さんにも上様を使うようになったという説。

二つ目は、上得意の客を意味する「上客」を略したという説。この説では、「上様」を「じょうさま」と読むのが正しいとされています。

こうして二つの由来を見てみると、どうやら領収書の宛名は「うえさま」ではなく「じょうさま」と読むのが正しいようです。

「世論」というのも「よろん」「せろん」どちらが正しいのか迷う言葉ですが、大方は「よろん」と読んでいくようです。

世論の読み方が「せろん」「よろん」と分かれるようになったのは、もともと漢字である「輿論」の「輿」が、当用漢字表に含まれていないため、「世」という文字を代用して使うようになったからだといえます。「輿論」は世間一般の共通意見、「世論」は世間の噂や風評をあらわす言葉だから、「世論調査」等は「よろん」、世の中の噂や風評をあらわすときは「せろん」と使い分けるべきだ、と主張する人もいます。

「よろん」の読み方が多数派とはいえ、「世論」という言葉の成り立ちを知る人にとっては、その使い方に違和感を覚える人も少なからずいるようです。

ただ、日本語は変わっていくもの。今後も「世論」をどう読むか、その読み方に対する世論に注目していきましょつ。

OWL INFORMATION

「人間観」を基軸に哲学と医療を考察

響き合う哲学と医療
船木祝・著
定価:本体2,000円+税

「あうるの杜」でご紹介した船木さんによる「人間観」を基軸にした論考。これまでに発表した哲学と生命倫理学の論文から、終末期医療や生殖補助医療、高齢化社会の問題を取り上げたものを一部改変し、収録しています。

社会の分断が問題視される今、どのような社会倫理が働き、共同体形成の実現を困難にしているかを哲学の視点から浮き彫りにし、影響し合い、模索を続ける社会の課題を提起した一冊です。



中西出版
四六判、255頁
2020年6月刊行

発達障がいと向き合う等身大の対談集

ひきこもり事務長
ぼくのは2つある
木村瑞穂・編
定価:本体1,200円+税

児童発達支援を行う「むぎのこ」を擁する社会福祉法人の事務長・木村さんを中心に、そこで育った子どもやその母親、職員が、それぞれの目線でざっくばらんに「発達障がいのある暮らし」を語り合う対談本ができました。

木村さんは自らを「ひきこもり」と語る異例の存在。現実逃避と現実直視を行きつ戻りつした20年の集大成のような、サクセスストーリーでも克服ストーリーでもない、様々な人が一緒に生きた記録です。



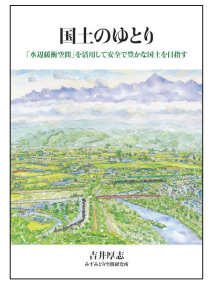
中西出版
四六判、181頁
2020年7月刊行

持続可能な開発を目指す糸口に

国土のゆとり
「水辺緩衝空間」を活用して安全で豊かな国土を目指す
吉井厚志・著
定価:本体2,500円+税

深刻化する自然災害の被害軽減と持続可能な開発の両立を求められる中、北海道や東アジアでの国土保全と環境保全の現場の経験から導かれた「水辺緩衝空間」保全の意義と、「国土のゆとり」の必要性を含む空間的議論の重要性を実例で検証。

洪水や噴火、地震、土砂災害に加え海岸保全対策など、あらゆる自然災害の減災へ向けた新たなアプローチの提起と、今後の課題解決への糸口が示されています。



中西出版
A5判、262頁
2020年8月刊行

2016年の前著を大幅アップデート

金融のしくみと証券市場
「経済の血液」はどう流れるか
玉山和夫・著
定価:本体3,636円+税

2016年刊行の前著『新・金融経済と証券投資』を、最新の情報に合わせて大幅に加筆・修正・再編集。金融・経済・証券投資について知りたいすべての人に向け、入門から応用までを網羅した実用書がアップデートされました。

本改訂では構成を大きく見直し、より具体的な事例に言及しながら実際の経済活動と金融市場の関係を解説。最近の動向を扱う新たな章を設けたほか、図表やコラムを追加・更新しています。



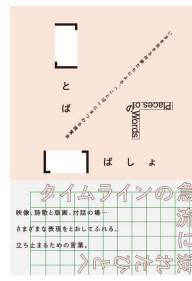
中西出版
A5判、391頁
2020年6月刊行

「言葉」の表現を紹介する展覧会図録

ことばのいばしょ
札幌文化芸術交流センター SCARTS・著
定価:本体1,500円+税

今年の8月から9月にかけて札幌で開催された展覧会「ことばのいばしょ」。コミュニケーションの最も基本的な手段である「言葉」を作品のモチーフや手法とした、同時代の表現を紹介するこの取り組みが、図録になりました。

言葉が本来の、あるいは新しい力を発揮する「居場所」としての作品を提示した本展。詩と映像、映像とテキスト、さらには詩歌と版画のコラボレーションで「言葉」がもたらす想像力を表現しています。



中西出版
A5判、96頁
2020年11月刊行予定

温かな色彩に包まれた冬の絵本

ゆき ゆき ゆき
ほんままゆみ・作、みちいずみ・絵
マラ・ベネマン、ほんまこうすけ・英訳
定価:本体1,500円+税

「ゆき ゆき ゆき/ゆき きらつ きらつ ゆき きらら」。白い卵から飛び出した「しろ」とその兄妹や森の仲間が、一面の雪の中で遊ぶ、冬にふさわしい絵本が完成しました。

絵を担当したみちさんの遺志を引き継いだ絵本作家のちばみなこさんが仕上げた水彩画は、雪遊びを楽しむ兄妹たちが温かな彩りに包まれながら、いきいきと描かれています。また、本書の利益の一部は子どもに役立つ分野で活かす予定です。



中西出版 A4変型判、34頁
2020年11月刊行予定



コロナ禍の状況は続いているが、世の中は徐々に経済活動を活性化させる方向に動き始めている。手探りではあるが、人数制限をかけリモート配信との組み合わせで、果敢に出版イベントを実施した出版社も身近にある。個々にSNSやYouTubeを利用した販促活動が主になっているが、時には複数の出版社で合同企画としての実施も試してみたいものだ。こんな状況の中、朗報があった。昨年8月弊社刊行の佐藤武氏の詩集『カロートの中』が第23回日本自費出版文化賞の部門賞を獲得したことだ。残念ながら表彰式は中止となるが、式典に代わる特別冊子を制作することになり弊社もお手伝いをさせてもらう。(Y)

■発行・編集／中西出版(株)
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
電話011-785-0737 FAX011-781-7516
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
■発行責任者／林下英二
■発行日／2020年10月15日 <http://nakanishi-shuppan.co.jp>

